

Sadamoto WATANABE* & Masao OHKI**: A new species
of *Betula* from Hokkaido

渡辺 定元*・大木 正夫** 北海道産カバノキ属の一新種

Betula (Sect. *Humilis*) ***Tatewakiana*** M. Ohki et S. Watanabe, sp. nov.

Frutex 1.5 mm altus ramosus. Cortex trunci cineraceus chartaceo-solutus. Ramuli novelli pubescentes mox glabri densissime glandulosi. Gemmae angustovatae, squamis margine hirsutis persistentibus. Petioli 2-6 mm longi primo sericeo-villosi demum pilosi. Folia coriacea, elliptica vel ovata interdum obovata, apice acuta basi integerrima cuneata, margine argute serrata, 1.2-3 cm longa, 0.8-2 cm lata, utrinque 4-6-costata subtus glandulosa, juvenilia sericeo-villosa demum leviter hirsuta, et ad nervos hirsuta. Amenta mascula in ramulis elongatis annotinis terminalia vel terminali-axillaria pendula, cylindrica, 1.5-4 cm longa 3-4 mm crassa. Amenta fructifera in ramulis lateralibus erecta, oblongo-cylindrica 0.9-1.5 cm longa 3.5-7.5 mm crassa, in anthesi 6 mm longa 1.8 mm crassa, stylis rubescentibus, pedunculis 1-5 mm longis; bracteae leviter pilosae trifidae vel trilobae margine ciliatae 2.8-4.2 mm longae 2.7-3.4 mm latae, lobis subaequilongis mediis leviter

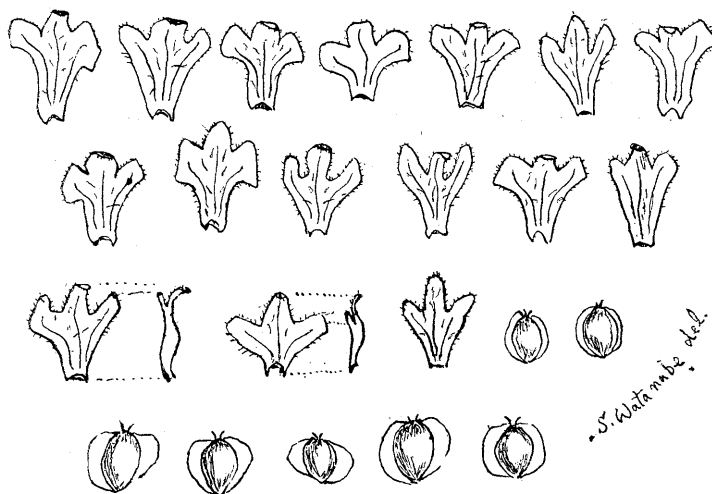


Fig. 1. Bracts and nutlets of *Betula Tatewakiana* M. Ohki et S. Watanabe (\times ca. 3.2).

*, ** Obihiro Regional Forest Office, Obihiro, Hokkaido. 帯広市帯広営林局計画課。

extrorsis. Nuculae obovatae vel ellipticae apice minute pubescentes, 3 mm longae 1.8 mm latae, alis angustis vel latis.

Nom. Jap. Yachi-kanba (n. n.).

Hab. Hokkaido. Prov. Tokachi: Sarabetsu moor (M. Ohki, VIII. 18, 1958-Typus in Herb. Fac. Agr. Hokkaido Univ.; M. Ohki et S. Watanabe, V. 5, 1959; S. Watanabe, IX. 6, 1959)

The plant distinctly differs from the related species by the narrow fruit, the short middle lobes of the bract with very short extrorse tip, and by the thick leaves with 4-6 veins. It is found only in the moor at Sarabetsu situated in the middle part of Prov. Tokachi.

The species is named after Prof. M. Tatewaki in the honour of his 60th birth day.

筆者の一人大木は、1958年8月18日十勝平野のやや西南部に位置する更別泥炭地 (Fig. 2) において、広島大学の鈴木助教授とミズゴケ採集のおり、ヒメカンパ類の一種を採集した。幸い、北海道大学の館脇教授の指導により本種に対して研究する機を得た。コウアンヒメオノオレやアボイカンバに近似するが、果穂は細く小形、果苞は3中裂又は3浅裂で中片短かくやや外向、葉は革質で厚く一般に鋭脚、葉脈は4~6条で打ちこんでいる等、種々の差異点があり新種と認める。尚、葉形は個体による変異が多く、極端なものは円形や狭披針形のものも現われる。

本種は北太平洋フロラに大いなる貢献をされつつある館脇教授の還暦を御祝し、先生を記念して *Betula Tatewakiana* なる学名を献じた。和名ヤチカンバは湿地生なる故命名したが産地附近の住民は本種にヤチハギ (野地萩) なる名を冠している。

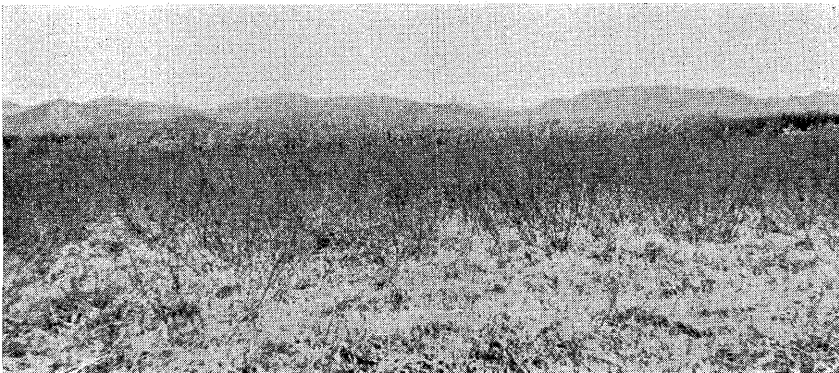


Fig. 2. Community of *Betula Tatewakiana* in the moor at Sarabetsu (V. 5, 1959).

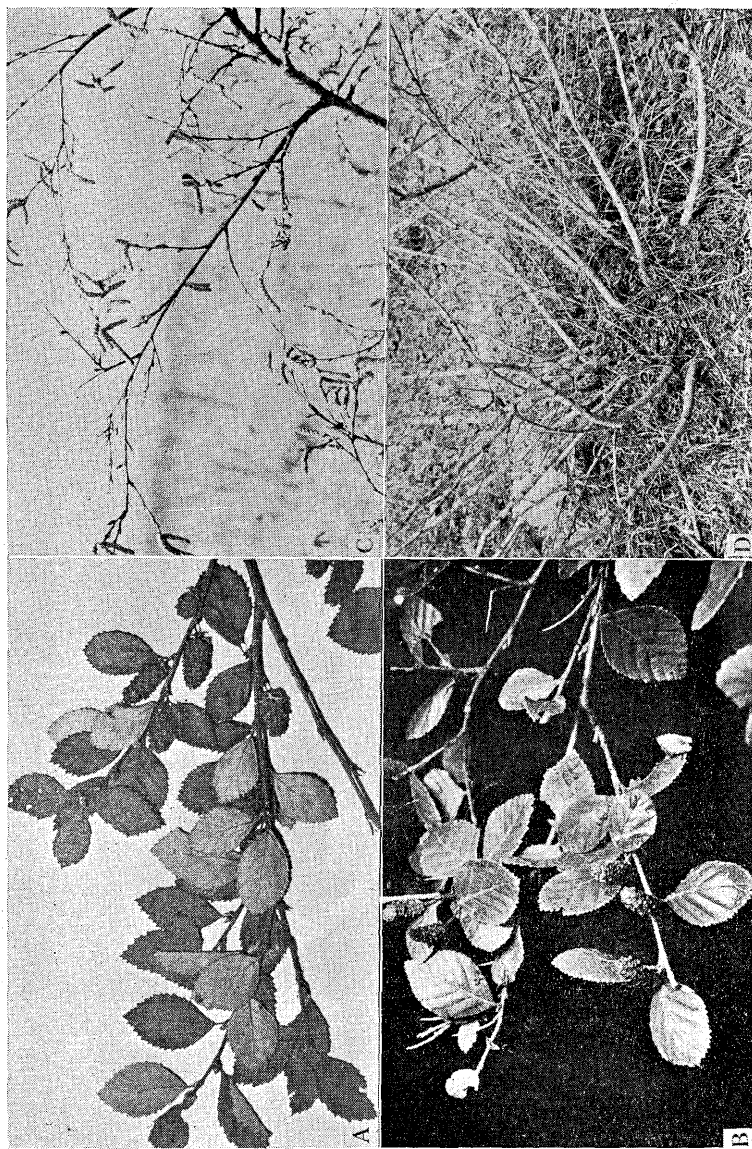


Fig. 3. *Betula Tatewakiana* M. Ohki et S. Watanabe. A: Type (photo IX, 6, 1959). C: male flower (photo IX, 6, 1959). B: shrub form (photo V, 5, 1959). D: shrub form (photo V, 5, 1959).

更別泥炭地は周囲約 10 km 面積ほぼ 600 ha, 流水の個所にはハンノキ, ヤナギ林がみられる他大部分は“やちぼうず”によつて占められている。ヤチカンバは湿原の外縁部の“やちぼうず”上に生じ, 特に西側では幅 20~100 m, 長さ 1500 m の大面積に亘り群落を形成している。したがつてヤチカンバは, 過湿な“やちぼうず”上には生えず, やや乾燥せる“やちぼうず”上に叢生している。5 月初旬開花時に当地を訪ねた時は中央部は湿地であつたがヤチカンバの生ずる“やちぼうず”の間は水が枯れていた。この地域は住民の話によると, 6 月になると湿地化するそうである。

ヤチカンバの生長は早く, 根生の新芽は一年 20~50 cm 延びる。直径生長は年 1~4 mm, 樹令は根元の年輪より推すとほとんどが 6~8 年生であつた。これは最寄の農民の話によれば, 昭和 28 年この湿原は野火に見舞われ, ヤチカンバは全焼し現在の群落は, その後に萌芽成林したものである。また過去 20 年来, ヤチカンバは樹高 2~3 m であり, 昭和 28 年以前もたびたびこの湿原は山火の被害をうけている。このことから, ヤチカンバは灌木か亜喬木なるかは不明であるが, 樹高 1.5~3 m で果穂をつけることや, ヒメカンバ類の一般的特性からして, 喬木になることはないと思われる。

ヤチカンバ群落は, 生育地の環境より推してツンドラ灌木原の十勝地方に隔離されたものと解され, 寒地植物の分布上非常に興味ある問題を提起している。

なおこの湿原は昭和 28 年より馬が放牧されており, また近い将来, 北海道 5 カ年計画による泥炭地開発が予定されていることを附記する。

○高等植物分布資料 (13) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (13).

○トネテンツキ *Fimbristylis Stauntoni* Debx. et Franch. var. *tonensis* Ohwi. 北支系の植物と目し得るトネテンツキは北九州 (母種ハタケテンツキとして), 本州 (近畿, 関東地方) に点生する稀種である。これが羽前北村山郡楯岡町湯沢沼 (現在は村山市楯岡) に産することを知った。1957 年 9 月 28 日に結城嘉美氏の採集する所である。邦内では北は上州伊勢崎市 (国立科学博物館標本による) まで行っているが, これで更に北上していることになる。種としての国内の産地は肥前, 肥後, 摂津, 大和, 武蔵, 下総, 上総, 上野, 羽前であり, 他所にも十分期待出来るであろう。然し或はアゼテンツキなどと混同されぬでもなく, 其の時は 1) そう果が狭長楕円形で粒状突起を欠き, 2) 花柱が果期にも落ち去らぬという点で截然他品と区別出来よう。此の花柱の性質は大井博士の日本植物誌 228 頁のハタケテンツキの項に記してないが (1944 年のカヤツリグサ科植物誌, 第 2 篇の 58 頁には出ている), 良い特徴の一つであると思う。

(都立大学牧野標本館 水島正美)